



Title	志賀直哉『流行感冒』論：「自己」と「他者」を中心に
Author(s)	モハammad, モインウッディン
Citation	阪大近代文学研究. 2011, 9, p. 24-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92673
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

志賀直哉『流行感冒』論

—「自己」と「他者」を中心に—

モハツマド モインウツデイン

はじめに

『流行感冒』は大正八年三月に執筆され(初出の末尾に「(大正八年三月廿二日)」という記載がある)、同年四月に『白樺』第十周年記念号に発表された⁽¹⁾。同月に新潮社の『代表的名作選集 第三十三 和解』に収録、その後大正十年二月に春陽堂から刊行された『荒絹』に再録された。また、翌大正十一年四月、改造社の『寿々』に再び収録された。原題は『流行感冒と石』で、この題名は『荒絹』までは初出のままになっているが、『寿々』において『流行感冒』と改題された。

その他、数々の訂正がある。初出の「私は不愉快だった。自身暴君であるより、皆に何んだか暴君にされたやうな気がして不愉快だった。」(『白樺』所収『流行感冒と石』)は「私は不愉快だった。如何にも自分も自分が暴君らしかつた。——それより皆から暴君にされたやうな気がして不愉快だった。」(『代表的名作選集 第三十三 和解』、『荒絹』所収『流行感冒と石』

と『寿々』、『志賀直哉全集』所収『流行感冒』)と訂正されている。また、「何か恐ろしい者が出来たとか、石は二幕の間どうしても震へが止まらなかつたと云つてきみに笑はれてゐた。」(『白樺』所収『流行感冒と石』)は「何か恐ろしい者が出来たとか、石は二幕の間どうしても震へが止まらなかつたのを便所へ行つてやつと直つたと云ふ話がある。」(『代表的名作選集 第三十三 和解』、『荒絹』)や「何か恐ろしい者が出来たとか、石は二幕の間どうしても震へが止まらなかつたのを暫くして、やつと直つたと云ふ話がある。」⁽²⁾(『寿々』、『志賀直哉全集』)などと修訂されている。ほかに、傍点の追加や字句の修正などが多い。

『流行感冒』では、最初のうちは「私」の自己を主張する態度を讀者に感じさせるが、作品が進むにつれて「自己」という枠組みから離れて「他者」を考慮するようになるのが読み取れる。作中には「私」のほかに「妻」、「石」と「きみ」(『女中』⁽³⁾)、「左枝子」(実子)が主として登場する。この

短編は（上）（下）二つに分けられているが、共に「石」が重要な登場人物として描かれており、（上）においては「石」の言動により「私」が疑い深くなり、（下）においては「私」の心理に大きな変化をもたらす原因となっている。本作品の主人公は、『和解』の主人公が父親の立場を思い遣ることなく自己の考えに固執しているのに比べて、また『十一月三日午後の事』の主人公が己の世界に閉じこもっているのに比して、自分個人に関心を集中していない。寧ろ最初は自分の子供の養育（主に（上））に神経質になっており、その後は、以前疑いの種だった「女中」（主に（下））にも配慮し、家族の一員のように見るまでになっている。

さてここで、本論で用いる「自己」と「他者」というキーワードが意味する内容について考えておこう。まず、『ブリタニカ国際大百科事典』⁽⁴⁾を見てみたい。それによれば、「身体的な境界をもとに自己と他者を区別し」⁽⁵⁾とあり、それは身体的に自分以外の者皆を他者として見るということであると考えられる。そして、『日本国語大辞典』⁽⁶⁾によればそれぞれ「おのれ。われ。自分。自身」と「自分以外の者。また、あるものに対するほかのもの」である。また、『平凡社大百科事典』⁽⁷⁾によれば、「自己でないものが他者である。したがって、他者はつねに自己との関係のもとで理解される。（中略）嬰兒が生後8カ月ころから自我形成を行う際には、愛すべき他者としての母親の認知が同時に並行して行われる

のである」とある。このように、「自己」以外の者、つまり血縁関係のある者もない者も皆「他者」となる。が、文学作品研究においてはこのような前提に従うとは限らない。栗林秀雄氏は血縁関係の者も「他者」として考えている⁽⁸⁾が、作品の分析において血縁者を論考の対象とはしていない。また、大久保典夫氏は「他者」とは、「自己」の外にある外界を指す（中略）。「他者」とは「自己」にとつてまったく異質なものであ⁽⁹⁾ると言っており、明確に血縁関係のある者とならざる者の間の区別はしていない。身の回りの者つまり血縁者や友人などを頻繁に登場させる志賀直哉の作品の場合は「他者」をどう定義できるだろうか。志賀作品の研究史において、「他者」という視点で書かれた論文は少ない。それらにおいても、「他者」の定義は明確にされていない。十重田裕一氏⁽¹⁰⁾は「友」を（主人公にとつて）「他者」であると見ているが、血縁者は論の対象となっていない。そのほか、松井貴子氏⁽¹¹⁾、田井英輝氏⁽¹²⁾、滝藤満義氏⁽¹³⁾の論文でも血縁者は論から遠ざけられている。

ところで、志賀作品を眺めてみれば、頻繁に登場する血縁者と主人公の関係は無視できないほど重要なものと思われる。主人公と血縁者の関係は安定せず、例えば主人公は、時に父と衝突や葛藤を起しほとんど縁を切ったような関係になる（例：『和解』『大津順吉』など）。このように、主人公は場合によって血縁者の父をいかにも受容し難い「他者」ら

しく突き放した存在として扱っている。他方、自分の子供のためほかの家族の者と衝突したり（例：『和解』においては主人公が幼い長女に死なれて父方の家族皆と縁を切ってしまう場面が詳しく描かれている。）する場面も見られる。以上のように、志賀作品における血縁者の描かれ方には様々な差異が見られる。前述の血縁関係のある者となし者を同列に「他者」として扱う考え方を志賀作品に当てはめようとしても、家族関係が中心となるのでそれは馴染みにくいと考えられよう。また、感情が入りやすい血縁者を血の繋がりのない者と同列に扱うことは、不自然に思われる場合もある。『流行感冒』においては、精神的にまだ独立していないと思われる幼い子供は、明らかな「他者」として扱われていないと考えられる。

取り上げるべき先行研究〔註〕が特になく本作品であるが、主人公にとつて明らかに「他者」である者を主な登場人物とする点で重要な作品と見ることが出来る。よつて、志賀直哉の作品群で「自己」と「他者」を論じる場合、本作品を避けて通ることはできない。本稿ではまず、主人公「私」の描き方を分析する。そして、時に「私」の決意に影響を与える妻を取り上げた後、主に「女中」、中でも「石」に注目しながら、本作品における「自己」と「他者」のあり方について検討してみたい。

一 「私」の心理の動き方

先に述べたように、（上）においての「私」と（下）においての「私」には心理的な差が見られるが、本章ではその差が現れる過程について考えたい。

一・一 臆病になる「私」

作品の冒頭においては、「私」は人並み以上に臆病であり、赤子を健全に成長させることに神経を集中している。

最初の児が死んだので、私達には妙に臆病が浸込んだ。
健全に育つのが当然で、死ぬのは例外だといふ前からの
考は変らないが、一寸病気をされても私は直ぐ死にはし
まいかといふ不安に襲はれた。（上）

「私達」に染み込んだ臆病の理由が説明されているものの、最初の子が死去した原因や事情については何も述べられていない。それはただ次子である「左枝子」の養育に「私」が過度に「臆病」になつてゐることを正当化するためだけに必要だつたのだろう。「私達」のその臆病は次のように描かれてゐる。

「去年はああ癖をつけて了つたから仕方がありませんが、此秋からは余り厚着をさせないやうに慣らさないといいけませんよ」夏の内、こんな事を妻はよく云つた。私もそれは賛成だつたが、段々涼しくなるにつれて、いつか前

年通りの厚着癖をつけさして了つた。そして私は、／＼「一体お前は寒がらない性だからね。自分の体で人まで推すと間違ふよ」などと云つた。／＼「お父様は又、人一倍お寒がりなんですもの……」夏頃頻りに云つてゐた割には妻もたわいなく厚着を認めて了つた。(上)

「私達」の行動は、「私達」が「左枝子」の健康状態に人並み以上に神経質であることを示している。「最初の児が死んだので、私達には妙に臆病が浸込んだ」とあることから、「私」と妻は左枝子の健康管理への思いを同じくしているように見える。「私」の臆病や神経質を肯定する態度は変わらせず、「左枝子の健康に絶えず神経質」な状態が続いている。また更に、他人にも同様に「左枝子には神経質になつて呉れ」るよう要求していく。「左枝子」の養育に対するその過度の神経質を時に「恥かし」く思つたり、自分のやり方は「田舎だから四囲の生活の釣合ひ上でも子供を余りに大事にするのは眼立つてよくなかつた」と思つたりすることもあれば、よその赤子の育ち方を見て「自分達のやり方が案外利口馬鹿なのだ」と感じたりすることもある。そこで、その臆病を正当化するために、大昔に死んだ兄の話までが振り返られている。

私の生れる半年程前に三つで死んだ兄がある。祖母に云はせるとそれは利巧者だつたさうだが、守が、使ひの出先で何か食はせたのが原因で、腹をこはし、死んで了つた。左枝子にそんなことがあつては困る。それ故、私

は自分の神経質を笑はれるやうな場合にも少しも隠さうとは思はなかつた。(上)

最初の子と違つて、ここは兄が死んだ原因として、子守りの失敗だつたと述べている。ここに、「私」が子守りという存在に對して、全幅の信頼を寄せられない遠因を読み取ることができるだろう。

さて、臆病に支配されている「私」は、流行感冒が流行つてきた時どのように反応するだろうか。

流行性の感冒が我孫子の町にもはやつて来た。私はそれをどうかして自家に入れないやうにしたいと考へた。その前、町の医者が、近く催される小学校の運動会に左枝子を連れて来る事を妻に勧めてゐた。然しその頃は感冒がはやり出して居たから、私は運動会へは誰もやらぬ事にした。實際運動会で大分病人が多くなつたと云ふ噂を聴いた。私はそれでも時々東京に出た。そして可恐々々自動電話をかけたたりした。然し幸に自家の者は誰も冒されなかつた。(上)

流行感冒に對する「私」の用心はいよいよその度合いを増し、できるだけ自家の者を外の人と引き離そうとする。一方自分は外出中も安心して仕事ができず、傍線部のように、病氣に對する臆病のあまり家へ電話をかけている。このような中で「私」は、「女中を町へ使にやるやうな場合に」は「愚図々々店先で話し込んだりせぬやうにと喧しく」注意してお

く。「女中」達はそれを承知したと思われるが、丁度その時期に近くで例年通り二日間の予定で「夜芝居」が興行されることになった。「私」は「女中」達がそこへ行くのを「特別に禁じて、その代わり感冒でもなくなつたら東京の芝居を見せてやろう」と考えていた。

見す／＼病人をふやすに決まつた、そんな興行を何故中止しないのだらうと思つた。／＼私は夕方何かの用で一寸町へいつた。(中略)沼向うからでも来たらしい、いい着物を着た娘達が所々にかたまつて場の開くのを待つていた。／＼歸つて来る途、鎮守神の前で五六人の芝居見に行く婆さん連中に会つた。申し合わせたやうに手織木綿のふく／＼した半纏を着て、提灯と弁当を持つて大きい声で何か話ながら来る。(中略)皆の眼中には流行感冒などあると思へなかつた。私は歸つてこれを妻に話して「明後日あたりから屹度病人がふえるよ」と云つた。(上)

このように、芝居興行に対して「私」は不安を強く感じ、流行感冒がもつと流行してくるだろうと恐れている。左枝子の養育に対する臆病に支配されてきた「私」が、芝居見物のため大勢の人が集まつてくるのを目の当たりにして、ますます不安になつてゐる様子が描かれている。こうして、「私」の臆病はその頂点に達してゐたと言えよう。

一・二 疑惑を持つ「私」

「石はどうした。ゐるか？」私は茶の間に坐つたまま訊いてみた。／＼「石もゐるんだらう？」と妻が取り次いでいつた。／＼「一寸元右衛門の所へ行きました」／＼「何しにいつた」私は大きい声で訊いた。これは怪しいと思つたのだ。(上)

このように、芝居興行の晩に石の不在を知つた「私」は、石も芝居を見に行つたのではないかと次のように疑いを深めていく。

「そりやいけない」と私は妻にいつた。「そりやお前、元右衛門の家へ行つたところで、夫婦共芝居へ行つて留守に決まつてるぢやないか。石は屹度芝居へ行つたんだ。二人共ゐなかつたから、それを頼みに出先へ行つたといつて芝居を見に行つたんだ」(上)

上述の如く、「屹度病人がふえる」とますます不安になつてゐる「私」は、石の不在がわかつたとたん石の行動に対して疑いを持ち、石は芝居を見に行つたんだ」と繰り返して断定している。そこには、日頃の不安が「私」の感情を支配し、「私」を疑惑へと一気に駆り立てる様子が読み取れる。

「なるべく然し左枝子を抱かさないやうにしろよ」(中略)「馬鹿。石に左枝子を抱かしてちやあ、いけないぢやないか。二三日はお前左枝子を抱いちやあ、いけない」私は不機嫌を露骨に出していつた。(上)

ここでは、昔、子守りのせいで兄が死んだ話が「私」の心

の中によみがえつてゐるのではないか。おそろくそれが原因で、石が芝居に行つたと信じてゐる「私」は、まだ石が感染してゐるかどうか分らないにもかかわらず、左枝子を石が抱かないようにと用心をしてゐる。一方で、そのような「私」も、自分の疑いを以下のように内省してゐる。

私には予てがらゝ、そのまゝ信じてゐる事は疑はずに信ずるが、いといふ考があつた。誤解や曲解から悲劇を起すのは何より馬鹿氣だ事だと思つて居た。今朝石が芝居に行かなかつたと断言した時に、私はその儘になるべく信じてゐるといふ風にも考へなかつた。半信半疑のまま、其半疑の方をなくさうと知らず、努力してゐた形であつた。所が半信半疑と思ひながら実は全疑してゐたのが本統だつた。かういふ氣持の不統一は、それだけで既にかなり不愉快であつた。(上)

波線部のように自分は本来理性的に物事を考える者だと思つてゐる「私」が、理性では疑いを否定しようとしつつも感情においては疑惑を持たずにいられないため、理性と感情の間はずれが生じてゐる様子が見られる。しかし結果として感情が勝つことで、「私」の心が疑惑に満ちていくと言へる。

「石はなんて云つてゐる」／「芝居へは行かなかつたんですつて」元右衛門のおかみさんが風邪をひいて寝てゐて、それから石の兄さんが丁度来たもんで、つい話し込

んでしまつたんですつて」(中略)「元右衛門のおかみさんが風邪をひいてゐるのに何時までもそんな所にゐるのはいけないぢやないか」／「元右衛門のおかみさんは風邪をひいてはゐません」／「春子(論者注：妻)はさういつたぞ」／「風邪ひいてはゐません」(上)

作中では先の本文の前に置かれてゐる上記の本文のように、妻が「元右衛門のおかみさんが風邪をひいてゐる」と言つてゐるのは石から聞いたためである。が、「私」にはそうでないと石ははつきり断言してゐる。石のこの答え方からみて、どこかに嘘があることは明らかであろう。

然し明瞭と嘘をいふ石は恐ろしかつた。左枝子が下痢をした場合、何か他所で食はせはしなかつたかと訊いた時、食べさせませんと断言をする。或ひは、自身が守りをしつてゐて、うつかり高い所から落とすとす。そして横腹をひどく打つとする。あとで発熱する。原因が知れない。さういふ時、別に何もありませんでしたと断言する。これをやられては困ると私は思つた。(中略)「石はもう帰さう。ああいふ奴に守りをさして置くのは可憐いよ。」(上)

兄の死因の話で予てから抱いてゐたであろう恐れや、左枝子の健康に関する神経質のせいで、「私」は以上のように石に対する不信を募らせる。その不信のため「私」は石について「恐ろし」く感じたり「可憐い」と思つたりするなど石の

「他者」としての側面が際立ち、強く他者性を感じている。そして、石に対する「私」の感情は最悪になっている。その結果、石を首にしようと「私」が決心するに至る思考の過程が、以上のように非常に明瞭に描かれている。

石が芝居を見に行つたのではないかと疑惑を持つ「私」が石を信用できなくなっていく様子が、「私」の考え方は石の行動に起因すると思わせるように叙述してある。そうして、「私」は石の解雇を当然であるように述べている。

一・三 「他者」の評価を気にする「私」

妻が左枝子を石に抱かせて現れた際に見られる「私」の怒りの場面（一・二の前半に引用）の続きを引用してみたい。

「いらつちやい」妻は手を出して左枝子を受け取らうとした。妻は石に同情しながら慰めるわけにも行かない変な気持であるらしかつた。すると左枝子は、／「ううう、ううう」と首を振つた。／「いいえ、いけません。いいや御用。ちやあちゃんにいらつちやい」／「ううう、ううう」左枝子は未だ首を振つてゐた。石は少しほんやりした顔をしてゐたが、妻にそれを渡すと、其まま小走りに引きかへして行つた。その後を追つて、左枝子が切に、「いいや！いいや！」と大きな声を出して呼んだが、石は振りかへらうともせず、うつ向いたまま駆けて行つて了つた。／私は不愉快だつた。如何にも自分が暴君らしい

がつた。——それより置から暴君にされたやうな気がして不愉快だつた。石は素より、妻や左枝子までが気が上で自分とは対岸に立つてゐるやうに感ぜられた。（上）

「私」は「気持の上」で実子までもが「自分とは対岸に立つてゐるやうに」と感じるようになってゐる。この瞬間においてのみ、「私」は左枝子に他者性のようなものを感じているように見える。日頃、夫と共に子供の健康に神経質である妻もこの段階においては「私」と考え方が違つてゐる。「私」は自分の石に対する疑い深い態度が一方的であり、「暴君」のように見えるだろうと思つたやうになつたのである。つまり皆が石に対する「私」の考え方に賛成してゐないと感じてゐるのである。これは、石を疑つてゐる「私」に後ろめたい気持ちがあるからこそであると考えられる。

若しも石が実際行かなかつたものなら、自分の疑ひ方は少し残酷過ぎたと思つた。石が沼向うの家に帰つて、泣きながら両親や兄にそれを訴へてゐる様子さへ想ひ浮かぶ。誰が聞いても解らず屋の主人である。つまらぬ暴君である。（中略）私は自分にも腹が立つて来た。（上）

「私」の石の扱い方が石や石の両親や兄にどのようによ受け取られてゐるかを考えており、これも先の「私」の後ろめたい気持ちによるものである。他者の扱い方に対して「他者」から批判や非難を受けてゐると考えるのは、やはり他者性を感じてゐるからである。自分の言動が相手にどのようによ

受け取られるかを想像する場面は、志賀の代表作『和解』にも見られる。

自分は宿屋の一部屋で自分の手紙を読んで不快な気持ちで一人居る父の様子を想像した。自分も不快になつた。然し**仕方がない**と思つた。(『和解』三)

これら二例の背景は必ずしも類似しているとは言えない。前者の場合は自分がやつたことを「少し残酷過ぎた」と思うようになるのに対して、後者の場合はそれを「仕方がない」と思うだけである。前者においては主人公が「他者」の評価を気にしているのに対し、後者の場合そうは感じられない。ただし、背景や目的は異なつていても、それぞれの主人公が自分の行動に対する反応を想像しているという点において共通していると言える。

「私」の気にかかつている人物の一人である石の母親が「私」の目の前に現れた時、「私」は注意深く観察せずにはいられない。

左枝子を抱いて縁側を歩いてゐると石の母親が庭の方から挨拶に来た。／「永々お世話様になりまして、……」といつた。石は未つ子で十三まで此母の乳を飲んだとか、母親には殊に大事な娘らしかつた。石の母親が感じている不愉快は笑顔をして、呻な言葉遣ひをしても隠し切れなかつた。顔色が変に悪かつた。そして眼が涙を含んでゐた。(上)

顔の表情や顔色で石の母親の心情を想像した「私」は、次のように感じ、石の母親に対し言い訳めいたことを言つたりする。

私は気の毒に思つた。然し此年寄つた女の胸に渦巻いてゐる、私に対する悪意をまぎくくと感ずると、此方も余りいい気はしなかつた。嘘に対し、私達は子供から厳格過ぎる位厳格に教へられてきた。ところが、石も、石の母親も嘘に対しては、それが嘘に留まつてゐる場合、何もそんなに騒ぐ事はないと思つてゐるらしかつた。却つてそれを云ひ立てて娘を非難する主人の方が遙かに性の悪い人間に見えたに違ひない。私は石に就て、今度の事は兎も角も悪い、然しこれまで石が不正な事をしたと思つた事は一度もなかつたし、左枝子の事も本当に心配しでくれた事を認めてゐるし、といふやうな事を云つた。私は石に汚名をつけて出したといふ事になるのは厭だつた。(上)

左枝子と同じように石も両親にとつて如何に大事であり、可愛がられてゐるかを理解し、石の母親の心情を「気の毒に思」う。一方、二重線部のように道德の面から石の育ち方を非難しているかのようであり、他者性を強く感じている。しかし「私」には石や石の母親などに「暴君」あるいは悪者と思われたくないという気持ちがあり、波線部のように石について良い点を認めるなど、あくまでも自分が「暴君」で

ないことを示そうとしている。石と石の母親に対して嘘を恥
じない点に、他者性を感じているからこそ、自分を正当化し
たいと強く考えていると思われる。

「私」は左枝子の子守りとしての石をひどく疑うようにな
っていきが、そのせいで自分が悪く思われることは避けたい
と強く考えている。この感情の動きは批判や非難から自己を
守ろうとする態度であると考えられよう。これはすなわち、
「私」の中で「他者」の存在が大きくなっており、明確に他
者性を感じていることを示唆していると言える。

二 「私」の心理を変化させるものへの視点

— 妻・石の場合 —

二・一 妻の場合

志賀作品の中で妻は避けて通ることができないほど頻繁に
出て来る登場人物の一人であり、妻の出て来る場面は主人公
の態度を理解するのに役立つであろう。『流行感冒』と近い
時期に発表された『和解』と『十一月三日午後の事』に見ら
れる妻の場面と本作品の妻の場面とを比較すると、主人公の
自己に関わる態度の違いが分かるだろう。そのため以下、そ
れらの作品の妻の描き方の例に触れつつ、本作品における主
人公の妻との関わり方について考えてみたい。

・自分は妻に財布とハンケチを出させた。妻は、／「町の

お使は如何するの？其鳴は今晚は駄目なの？」と云つた。
／「今晚は駄目だ」（『十一月三日午後の事』）

・「若しお前が俺のする事に少しでも非難するやうな気持
を持っては、お前も他人だぞ」自分は突然こんな事を云つ
た。妻は黙つて居た。「若し俺がお父さんの云ふ事をは
い／＼、諸く人間だつたらお前とは結婚してやしなかつた
ぞ」自分は囁かすやうに又こんな事を云つた。（『和解』
三）

『十一月三日午後の事』の妻の何気ない質問に対する主人
公の返事の仕方は非常に短く簡単である。また、『和解』に
おいては、「自分」の考えを妻にも押し付けられる態度が読み取
れる。それぞれ主人公の妻に対するわがままが見られ、「自
分」の自己中心的な考え方が感じられる。ところで、唯一の
長編『暗夜行路』の例を参考にしてみよう。この長編におけ
る夫婦間の重大な事件の一つである第四の、過ちを犯した妻
を停車場で突き飛ばす場面が目玉されよう。動き始めた汽車
から妻（直子）を突き飛ばした主人公（謙作）は自分がした
ことを後悔することになる。自分の意識では妻を許している
つもりでもかかわらず、心の苛立ちを抑えられず、思
わず乱暴な行動に走ってしまったのである。その結果妻との
間に溝が生じ、主人公の悩みは深くなる。これら三つの作品
の主人公の考え方は同じ木から出ている枝のように共通点が
見られる。つまり、妻に対して自分を中心としたもの見方

をし、相手への配慮をすることなくそれを表現している。これに対して『流行感冒』の場合は、一・一のはじめに引用した本文、石の解雇の場面、また作品の終わり頃の場面などからわかるように、「私」は「私」と妻を指して「私達」と呼び、妻の意見に耳を傾けている。そこから、家族の一員としての妻に対する「私」の親密な気持ちがかがえる。本作品における妻の描き方を更に検討してみよう。

「芝居を見に行つた時、出さなくて矢張りよかつた」／「石ですか？」と妻が云つた／「うん」／「本当に。そんなにして別れると矢張り後で寝覚めが悪う御座いますからね」(中略)「本当にさうよ。」／(中略)「全くの所、幾らかそれもあるの」といつて妻も笑つた。(中略)二人は笑つた。(下)

以上の如く、暖かい家庭の夫婦らしい雰囲気の話が見られる。前述の『和解』や『十一月三日午後の事』の妻の捉え方と比してやはり違つた扱い方である。『流行感冒』の場合は妻に関して、家庭生活を共にする相手らしい親密さが描写されている。ところが、場合によって以下のような場面も描かれている。

「お父様があんまり執拗くおうたぐりになるからよ。行かない、とあんなにはつきり云つてゐるのに、左枝子を抱いちやあいけないの何の……誰だつてそれぢやあ立つ瀬がないわ」／気がとがめてゐる急所を妻が遠慮なくつ

ツ突き出した。私は少しむかしくとした。／「今頃そんな事をいつたつて仕方がない。今だつて俺は石のいふ事を本統とは思つてゐない。お前まで愚図々々いふと又癩癩を起すぞ」私は形勢不穩を現す眼つきをして嚇かした。(上)

石を疑わずにはいられない「私」に対して、妻はその疑いに賛成しない。寧ろ「私」を批判しているが、「私」は妻の意見を素直に聞くことができない。このように、両者の間には意見の相違が見られる。また、この「嚇かす」という言葉は先に述べた『和解』の「嚇かす」と似通つており、『和解』の主人公と似た態度を取つているように見える。

・「お父様」と座敷の内から妻が「小手招き」をしてゐる。寄つて行くと、／「もう少し置いて頂けない？」と「小声で」哀願するやうに云つた。妻も眼を潤ませてゐた。(中略)ね、さうして頂けない？ その内角を立てずに暇を取つて貰へば、いいんですもの。石だつて今度で懲りたでせうよ。もうあんな嘘は屹度つきませせんよ。……さうして頂けなくつて？」／「……そんなら、よろしい」／「「ありがたう」」(上)

・母が不愉快な顔をして歸つて来た。そして縁側から自分に「手招き」をした。自分は起つて行つた。母は「小声で」「お祖母さんもネ、この御様子ならもう心配はありませんから、今日はどうかこれで歸つて下さい。ねえ、どうか気

を悪くしないで」と云つた。(『和解』十一)

・今、順吉の話で、順吉もこれまでの事は誠に悪かつたと思ふから、将来は又親子として永く交はつて行きたいと云ふ……さうだな？」と途中で父は自分の方を見た。

／「ええ」と自分は首肯した。それを見ると母は急に立ち上がつて来て自分の手を堅く握りめぐめて、泣きながら、
／「**ありがたう**。順吉、**ありがたう**」と云つて自分の胸の所で幾度か頭を下げた。(『和解』十三)

右の引用の如く、『和解』には『流行感冒』と共通する描き方が見られる。それぞれの主人公と関わる人物の立場が別々であっても、反応のしかたや主人公の注意を引こうとするやり方には共通項があると言える。『和解』では母が願っていることを「自分」が実現し、母に感謝されている。また、石が暇乞いをして出て行つた直後の箇所である上記の『流行感冒』の引用では、石を引き留めたいという妻の願いに「私」は耳を傾けているとある。ひどく石を疑っている「私」がこの段階において、妻の「もうあんな嘘は屹度つきませんよ」という言葉を信じたのだろうか。そうではなく、妻の哀願に近い懇願を無視することが「私」にはできなかったのである。妻の懇願ゆえに解雇を取り消したということが、妻の長い願いの言葉の後に続く「私」の「……そんなら、よろしい」という短い返事に表れていると考えられよう。その短い返事から自分の願いが実現されたと妻は理解し、「ありがたう」

と感謝している。

「私」と妻の間には、場合によつて意見の相違があるものの、ついに「私」は妻の願いを聞き入れる。本作品における「私」の妻の扱い方からは、「私」が自己主張ばかりせず、妻の考え方にも心を向けることにより、心理が変化する様子を見出すことができよう。

二・二石の場合

一・二において見たように「私」は石の行動に大きな疑惑を抱いており、石に対する不信が募っている。その結果石を解雇しようと思心するが、妻の願いでそれを取り消す様子を二・一で見てきた。本節では、石に対する「私」の考え方を探つていきたい。

(1) 石に対する疑いと嫌悪

一・二でも述べたことであるが、夜に主人に何も言わずに、「元右衛門の所へ行」つたと知つたとたん、「私」は「怪しいと思」う。「私」が石に対する疑いを持ち始める場面と見ることができよう。

「お前は本当に芝居には行かないね」／「芝居には参りません」／私は信じられなかつたが、答へ方は余りに明瞭してゐた。疾しい調子は殆どなかつた。(中略)それ故妻は素直に石のいつた通りに信じてゐる。私もさうか

も知れないといふ気を持つた。が、何だか腑に落ちなかつた。調べれば直ぐ知れる事だが調べるのは不愉快だつた。後で私は「ああはつきり云ふんなら、それ以上疑ふのは厭だ。……然し兎も角あいつは嫌ひだ」こんな事を妻にいつた。(上)

石の行動を怪しく感じている「私」は石を非常に嫌悪している。ところで、石に対する「私」の疑いが正当かどうかは「調べれば直ぐ知れる事」なのに、なぜ「調べるのは不愉快だつた」のだろう。石の言葉が「何だか腑に落ちなかつた」ためなのか。そうではなく、信用すべき「女中」について調べることは、その人に対する自分の疑いを認めることになるため、調べること自体が不愉快に思われたのだろう。更に、「私」の中には自分の疑いが間違いであれば良い、という希望があり、調べることによつて間違いでないことがわかるのを恐れたとも考えられるだろう。しかし、調べない為に疑いはいつまでもそのままになつてしまい、その疑いの対象である人物つまり石の存在そのものが「私」にとつて「嫌」なものになつてしまつたのであろう。石に対する「嫌」な感じ方は石の解雇を取り消した後も変わらない。その様子は解雇を取り消した後の場面に次のように描写されている。

石は全く平常の通りになつて了つた。然し私は前のやうな気持では石を見られなかつた。何だか嫌になつた。それは道学者流に非難を持つといふよりはもつと只何とな

く厭だつた。私は露骨に石には無愛想な顔をしていた。(下)

主人に解雇されかけ、かろうじて「平常の通り」の生活に戻ることができたという経緯も、石には何も影響を与えていないと考えられる。あるいは、石は何事もなかつたかのような顔をしているが、もしかすると、以前してしまつたことを忘れようと努力していたのかも知れない。が、そのような石の心情を思い遣るというようなことは、「私」には全くない。「私」の「何だか嫌」な気持ちはそのまま残つており、石に対して露骨に嫌悪感を示す。これは、嘘を認めようとしないう石に自分には理解できない「他者」を感じ、「私」がそのような「他者」を考慮することができなかつたためだと考えられよう。

以上に見て来たように、(上)では石に対する疑いや嫌悪が募つており、石を雇い直した後にも「私」の感じ方は変わっていない。石に対して強い他者性を感じており、心がまだ閉じたままになつてゐる。

(2) 石に対する気持ちの変化

さて、作品の終わりまでには「私」の石への感じ方はまるで変わつてゐる。その変化が起きる過程を見てみよう。

流行感冒に取り附かれた。(中略) 所が今度は妻に伝染した。(中略) 間もなくきみが妾になつた。(中略) 仕舞

に左枝子にも伝染つて了つた。健康なのは前にそれを済まして居た看護婦と、石とだけになつた。そして此二人は驚く程によく働いてくれた。／＼(中略)二枚の半纏でおぶつた石がいつも座つたまま眼をつぶつて体を揺つて居る。人手が足りなくなつて昼間も普段の倍以上働かねばならぬのには夜はその疲れ切つた体でかうして横にもならずにある。私は心から石にいい感情を持つた。私は今まで露骨に邪慳にしてゐた事を気の毒でならなくなつた。(中略)所が石はそんな気持ちには氣振りにも見せなかつた。只一生懸命に働いた。普段は余りよく働く性とは云へない方だが、その時はよく続くと思ふ程に働いた。その氣持ちは明瞭とは云へないが、想ふに、前に失策をしてゐる、その取り返しをつけよう、さう云ふ氣持からではないらしいが、つた。もつと直接な氣持かららしいが、私には總てが善意に解せられるのであつた。私達が困つてゐる、だから石は出来るだけ働いたのだ。それに過ぎないと云ふ風に解れた。(下)

家の者皆が病氣で困つた時に一所懸命に働いてくれる石の姿と、それをよく觀察している「私」の姿がここに表れている。一意専心に働く子守りと言へば、志賀作品では『佐々木の場合』の子守りが想起されるだろう。

……僕はお嬢さんの守つ兒(論者注「女中」富)と關係したんだ。(中略)僕達が逢引に一番いい時は主人の

家族が入つた後、風呂の湯が少くなるので又火をたく其時だ。(中略)女中の悲鳴が聞こえた。二人は驚いて物置を飛び出した。お嬢さんがたき火―既におきにはなつて居たが其処に仰向様に倒れて居る。直ぐ抱き起こしたが、もう氣を失つてゐる。毛がこげるとか肉が焼けるのか変な臭ひがした。(中略)頭だけは幸に火の端へ行つてゐたから夫程ではなかつたが、それも襟首の上が焼け爛れて、其処は後も毛が生えなかつたさうだ。(中略)

第一總ては富の落度になつた。(中略)其内人肉の必要が起こつた(中略)富が願ひ出た。それは心からさう云つて出た事が解つた。(中略)富がその手術を受けるために入院した(中略)一生お嬢様の御傍で働くつもりでゐます。(中略)こんな事を(論者注富が)云つて居る。

『佐々木の場合』

これらの作品の「女中」と子守りは、年齢的にも仕事の内容から見ても、共通するものがあると言える。ところが、石が主人のために一所懸命に働くのは明らかに富と違つて自責の念にかられてではなく、ただまごころで以て働くのである。石のその姿を見て「私」の考え方は大きく変化していき、以前の嫌悪感に代わつて「心から石にいい感情を持つ」つようになつてゐる。先の引用の波線部のように、石の心を込めて働いてゐる姿に対して「私」は快く思う一方、彼女の心境を想像しようとし、それまで感じていた他者性に変化を見出した

のである。ここに石に対して「私」の心が開いたことが読み取れる。

一ヶ月程してきみが帰つて来た。暫くすると、それまで非常によく働いてゐた石は段々元の李阿弥になつて来た。然し私達の石に対する感情は悪くはならなかつた。

(中略) 大概の場合叱つて三分あとには平常の通りに物が云へた。(下)

石が身を粉にして働いた時期が終わつて「元の李阿弥になつて来」ても、「私」の「石に対する感情は悪くはならなかつた」からは、以前の疑いや嫌悪感が排除された「私」が石に前ほど他者性を感じなくなり、心が石に対して開いた状態で、「他者」である石をも受け入れることができるようになったのだと考えられる。そして、そのうち「石には結婚の話があつて、石が離れることに決まつた。「私」はほかの「女中」を探そうとしたが、ついに「石の代わりはなかつた」。つまり、石は「私」にとつて雇い人としての「女中」を超えた家族のような存在になつていたと考えられよう。

一月半程していよく、石の帰る時が近づいたので、或る日二人を近所へ芝居見物にやつた。(下)

いよいよ石が帰る日が近づいてくると、「私」がその前にお別れとしてわざわざ芝居を見に出してやることにするが、それはなぜだろう。石が帰つた後、妻と話している「私」が、「芝居を見に行つた時、出さなくて矢張りよかつた」と言う

場面があるが、これは「私」の心のどこかに例の芝居の件が未だに根強く残つてゐることを暗示していると言えるだろう。石が帰る前にわざわざ芝居を見に出すのは、その不愉快な事件で残つてゐるしこりを、最終的に取り除きたいという思いからではないだろうか。

いよく石の帰る日が来たので、先に荷を車夫に届けさせて置いて、丁度天気の良い日だったので、私は妻と左枝子を連れて一緒に上野へ出かけた。停車場で車夫から受け取つた荷を一時預けにして置いて、皆で動物園にやつた。そして二時何分かに又帰つて改札口で石を送つてやつた。私達には永い間一緒に暮らした者と別れる或氣持が起こつてゐた。(中略) 石がゐらなくなつてからは家の中が大変静かになつた。夏から秋になつたやうに淋しくも感ぜられた。(下)

ここには家にいなくなつた石に対する「私」の心情が巧みに表されている。一時あれほど嫌いになつた石の不在に対して、「夏から秋になつたやう」というほど淋しくなつた「私」の氣持が情緒豊かに描写されている。

石が帰つて一週間程経つた或晩の事だ。私は出先から帰つて来た。そして入口の鐘を叩くと、其時戸締りを開けたのは石だつた。思ひがけなかつた。笑ひながら石は元氣のいいお辞儀をした。「何時来た？」私も笑つた。(中略) 石は今、自家で働いてゐる。不相変きみと一緒に時

々間抜けをしては私に叱られてゐるが、もう一週間程すると又田舎へ歸つて行く筈である。そして更に一週間すると結婚する筈である。良人がいい人で、石が仕合せな女となる事を私達は望んでゐる。(下)

石が戻ってきたのを「私」は素直に喜んでおり、石に対する温かい気持ちが表示されている。また、まるで家族の一員のようになり、石の幸せな結婚生活を望むまでになつてゐる。「私」の心の中で、石は嫌悪の対象から、不在を惜しむ存在へと大きく変化を遂げたのである。それに対して、実際の石に焦点を当てて見ると、「それまで非常によく働いてゐた石は全く平常の通りになつて了つた」「石は段々元の空阿弥になつて来た」「不相変きみと一緒に時々間抜けをしては私に叱られてゐる」のように、石の態度は特に変化してはなくなつたことがわかる。このように、石があまり変わつていなくても「私」の見方が変わったのである。

以上に見てきたように、家中の者が流行感冒にかかつてしまつた時、皆のために一意専心に働いた石の態度に「私」は大変感銘を受ける。そして、それ以来すっかり心情が変化し、石が失敗してもそれを許す寛容さが「私」の中に生まれる。石に対するかつての不信が、いつしか大きな信頼へと変わったのである。このように「自己」が他者性を受容できるようになり、「他者」への視点を獲得することによつて、自分の心理が大いに變化している様子が読み取れる。

おわりに

本稿では、「私」の心理の動き方について検討を行い、妻や石に対する場合を取り上げ、取り分け「私」の石への視点を中心に考えてみた。本作品における「私」の行動の原因となつてゐる左枝子を流行感冒にからせないよう過度に神経質になつてゐる「私」の態度は、まさに自己中心的である。左枝子のためとは言え、石を非常に疑うようになつてゐる「私」は、石に対して強い他者性を感じる。「私」の石への要求は多分に自己中心的と言えよう。

(上) から (下) の冒頭にかけての「私」の石に対する考え方やそれを正当化する態度には、「私」が石に感じている他者性が反映されていると考えられる。しかし作品の後半においては、家族全員が流行感冒にかかつてしまふという出来事をきっかけに、石という「他者」への「私」の視点が大きく変化する様子が簡潔かつ繊細に描出されている。本作品には自己中心的な考え方から出発した「私」が、石に一人の「他者」としての存在の意味があることを理解し、それを受け入れるようになったために至つた「私」の心境が読み取れよう。

注

(1) 『志賀直哉全集 第二十二巻』所収「著作年表」(岩波書店 二〇〇一年)

(2) 全集の後記においては、『荒絹』、『代表的名作選集 第三三 和解』と変わらず「何か恐ろしい…のを便所へ行つてやつと直つたと云ふ話がある。」と記述されているが、全集における本文には、『寿々』と同じように「何か恐ろしい…のを暫くして、やつと直つたと云ふ話がある。」と記されている。

(3) 「女中」という言葉は現代では差別に近い言葉なのだが、本作品を論じる場合この言葉を避けて通ることは出来ない。『日本国語大辞典 第二版 七巻』(小学館 二〇〇一年)によれば、「女中」という言葉には、①宮中、将軍家、また公家、大名家などに士官・奉公している女性。②女性を敬つていう語、③料理屋、旅館、また、一般の家に雇われて台所仕事などの下働きをする女性、などの意味がある。また、近代、特に二十世紀初頭(明治後期〜大正期)の日本において、家庭に住み込みで奉公する家事使用人のことである。(『国史大辞典 第七巻』吉川弘文館 一九八六年、及び、清水美知子『女中』イメージの家庭文化史』世界思想社 二〇〇四年を参照)。志賀直哉の実生活においては「女中」について独自の見解があり、彼は「手帳」で自分なりの考えを表している。「日本の社会では儒教の感化が甚だしいので習慣として今でも夫婦でない男と女とが、心を打明けてユツクリ話し合ふ事が出来ない、／されば互いによく知り合つて後でなければ結婚せぬと決心した青年にとつては他の令嬢とスツカリ知り合ふといふ事が不可能なのだから結婚は出来ぬやうな事になる、こんな考へを持つてゐる青年は何れかといへば真面

目な青年である、真面目な青年は今の学生のキザな連中のやうに女の出入りする所へあつかましく行くやうな事は敢てせぬ、彼等は真面目な男とのみ話し論じてゐる、彼等の接する女性は彼等の姉妹か、親族のものか、それでなければ、自家の maid だけである、(中略)若し maid の内に彼等の興味を解し話しを解するやうなもの或るは男をアットラクトする力を有するものある時には彼等はそれを愛する、彼等は彼等の家族と異なつて階級について自由な考へを持つてゐる、而して、maid とは常に接してゐるし、その上多少話し合ひ知り合ふ時には彼等は遂に maid と結婚する、かういふ傾向が追々出て来るだらうと余は思ふ(八月五日)〔手帳八—一九〇七年〕。上記の叙述の背景には、志賀の年譜の「この頃から、家の女中(日記中の「C」)を思うやうになる。／八月四日、祖母留女、英子、直三、淑子らと箱根へ行き、二十日まで滞在。(中略)二十二日女中「C」と結婚を約す。父、祖母、義母らはこの結婚に反対。」(「年譜」一九〇七年)という事実があると考えられる。自分自身が「家の女中」との恋愛の渦中にあるが故に、自己弁明をしつつ「手帳八」のような書き方をしている。志賀直哉の作品における「女中」と言えば、「女中C事件」をモデルにした作品『大津順吉』の小間使の千代が思い出される。もし「女中」を描写する志賀の作品を挙げるなら、『大津順吉』はその嚆矢である。その作品の詳細な描写は「年譜」の内容と非常に一致している。

(4) 『ブリタニカ国際大百科事典』(ブリタニカ・ジャパン 一九

九五・一九九六年）〈望月登志子「自己意識の発達」第九卷 四三二頁〉

(5) 『ブリタニカ』ではこの基準のほか「自己概念の基礎は自分の行動の起源として、また行動する意志の発動者として、自分を自覚することにあるが、認知能力や社会的能力の発達に伴い自己をとらえる観点は異なってくる。」(出典は注(4)と同じ)とも述べられている。

(6) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館 二〇〇一年)

(7) 『平凡社大百科事典』(平凡社 一九八五年)

(8) 栗林秀雄氏の論文(小説における他者認識の「場」についての試論(一))、『大東文化大学紀要(人文学)』第三十四号 一九九六年三月)では「肉親の中に他者」の存在を認め、「一般的にこの世に生を享けて、まず家庭内にあつて肉親の中に他者を発見することが人生の出発としては考えられる。それ以後は親類縁者、隣り近所の地域社会での他者の存在を感得するであろう。」という文章が見られる。ここから考えれば、氏は肉親の者や家族の者皆を他者として考えていると言える。

(9) 大久保典夫「自己と他者——太宰治・その原質——」(『国文学 解釈と鑑賞』第三十九卷十五号 一九七四年 二月)

(10) 十重田裕一「志賀直哉と他者——城の崎にて」、忘却される起源」(『国文学 解釈と鑑賞 特集二十一世紀の志賀直哉』第六十八巻八号 二〇〇三年八月)。この論文では一族の者は出てこない。

(11) 松井貴子「志賀直哉のまなざし——母から妻へ、そして、自己から他者へ」(『宇都宮大学国際学部研究論集』第二十二巻 二〇〇六年一〇月)

(12) 田井英輝「他者のまなざし——初期志賀直哉論への一視点——」(『京都教育大学国文学会誌』第二十三号 一九八九年六月)

(13) 滝藤満義「志賀直哉の初期作品——他者の行方——」(『千葉大学人文研究』第三十一巻 二〇〇二年三月)、「志賀直哉初期犯罪小説——他者の行方Ⅱ」(『千葉大学人文研究』第三十二巻 二〇〇三年三月)

(14) 古川裕佳「志賀直哉の(家庭)——女中・不良・主婦」(『森話社』二〇〇一年)において、本作品が「女中」という視点から言及されているが、詳細な分析は十分になされていない。

(モハツマド・モインウツディン／本学大学院博士後期課程)